

令和2年度

第3回 静岡県総合教育会議

議事録

令和3年1月15日（金）

第3回 静岡県総合教育会議 議事録

- 1 開催日時 令和3年1月15日(金) 午後1時から3時まで
- 2 開催の場所 県庁西館4階第1会議室A、B(対面とオンライン併用による開催)
- 3 出席者
知事 川勝平太
教育長 木苗直秀
委員 渡邊靖乃
委員 藤井明(オンライン出席)
委員 伊東幸宏(オンライン出席)
委員 小野澤宏時(オンライン出席)
委員 後藤康雄

地域自立のための「人づくり・学校づくり」
実践委員会副委員長 池上重弘

総合教育局長： それでは、委員の皆様御出席いただきましたので、ただ今から第3回総合教育会議を開催いたします。

本日は、お忙しい中御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

本日の議事は、才徳兼備の人づくり小委員会中間報告、未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進であります。

開会に当たりまして、知事より御挨拶を申し上げます。

川勝知事： どうも皆様、厳しいこのコロナの感染拡大の中で御出席賜りまして、誠にありがとうございます。

今日は、フェース・ツー・フェースで御出席いただいた委員の方々と、それからウェブ上で御参加いただく先生方ということでの開催になりました。

また、実践委員会の方からは、副委員長の池上先生に御出席を賜っております。

この小委員会を実践委員会の中でつくられまして、そのタイトルが才徳兼備の人づくり小委員会中間報告というものでございますが、その中身の一つが高等学校をどうするかということだと承知しております。

今、御案内のように、政府の方では、萩生田大臣から令和3年度から35人以下学級というものを全国に普及させるということで、35人学級と言われてはいますが、35人以下にするということで、小学校をやるということですが、静岡県は教育委員の皆様方の御高配、また木苗先生など教育関係の方々、学校の先生方の御協力によりま

して、平成22年度から始めましてもう全部終わっております。要するに文部科学省は静岡県を追いかけてくるという段階になりました。

そして、小学校、中学校と、当初はある程度の人数がいけないといけないということで、最低25人は1学級いなくてはいけないというわけで、25人というのを最低とすると決めていたのですが、やはりこれは現場の先生方の御要望がありまして、25人とかという下限も撤廃してくださいということで、これは県議会の御了解も賜りまして下限も撤廃したので、したがって極端な場合、10人と13人の学級があっても構わないと、こういうようなことをございます。

そうした中で、中学校を卒業しますと、高等学校に行くと今度は40人以上でないと学級をつくれないうことになっておりまして、首尾が一貫していないということにおいて首尾が一貫しているということが続いておるので、これをいかにして整合的にするかという問題意識を今日は御出席の池上先生ほか実践委員会の方でも持っているということをございます。

そういう意味で、我々は日本の教育、これを先導していくという使命感も持ってこれから総合教育会議を運営していきたいと思っております。

それから、最近の話題で、PL学園を卒業なさって巨人に入られて、それからある時から大学院に行かれて、そして見事に修士号をお取りになって大学のコーチなどを務められながら、このたび巨人軍のピッチングコーチに就任されることが発表されました。この桑田さんは、PL学園、すなわち高等学校を御卒業の後、大学に行っておられません。しかしながら、社会において実践を積み重ねて、そしてそれがもう学士同等だということで大学院の入学資格をお取りになって、そして大学院を終えられていると、こういうわけですから、小・中・高・大・大学院とかという今の既定路線がもう既に破られているということの証左です。

また、今日御出席の伊東先生は、いわゆるトップガン方式で、それを一時期心得てくださったということもありまして、またこの間亡くなられました有馬朗人先生もそれを進めるべしということをおかれておられました。

そうしたいろいろな意味で私どもは新しい日本をどうつくっていくかと、ポスト東京時代、これをふじのくに静岡県から開いていくと、こういう気持ちを持って、特に今日は小野澤先生もいらっしやっておりますので、スポーツを中心にした形では、これはいわゆる英・数・国・理・社中心主義ではもうないということが明確な教育委員の中に入ってきてくださっている存在理由の一つではあります。

そういうことから、大きくこれから変えていこうと、こういう新しい教育の在り方をつくっていくと、社会総がかり、地域ぐるみで

つくっていくと、こういう観点でこれからの総合教育会議を運営してまいりたいと思っておりますので、どうぞ御協力方よろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

総合教育局長： 次に、木苗直秀教育長より御挨拶をいただきたいと思います。

木苗教育長： 皆さん、明けましておめでとうございます。教育長の木苗でございます。

日頃、皆様には、細部にわたりましていろいろと御助言を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、本日の議事は、才徳兼備の人づくり小委員会中間報告及び未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進についてであります。

才徳兼備の人づくり小委員会につきましては、本日御出席の池上実践委員会副委員長様の下で、新しい時代に対応した高等学校教育の在り方をテーマに、ニーズの調査とともに学校を視察され大変熱心に御議論をいただいたと伺っております。心より御礼を申し上げます。

高等学校教育を取り巻く状況は、特に少子化の進行、あるいは昨年来の新型コロナウイルス感染症の影響によりまして急激に変化してきております。その中で、小委員会では次代の担い手の育成という観点から、高校と地域社会との連携に着目して議論が進められたと伺っております。本日の資料に添付されております中間報告を興味深く拝見いたしました。後ほどさらに詳細な御説明や、あるいは委員の皆様からの御意見をいただきまして、御提案の実現に向け教育委員会として真摯に検討してまいりたいと思います。

また、未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進につきましては、子供たちの秀でた才能を更に伸ばすことや、グローバル人材の育成が論点とされております。本年度、教育現場では、第1回会議の議題となりましたICTの導入が急速に進み、個別最適化された学びの実現に向けて環境が整いつつあります。

また、この時代におきましても、地元企業や大学などとの地域連携は極めて重要な要素となってきております。従来の学校教育の枠にとらわれず外部の最新の知見を活用しながら、どのように子供たちの才能を伸ばしていくことができるか、活発な御意見をいただければ幸いです。

それでは、本日はよろしく申し上げます。

総合教育局長： ありがとうございました。

それでは、議事に入りたいと存じます。

これからの議事進行につきましては、川勝知事にお願いいたします。

川 勝 知 事： ありがとうございます。
それでは、次第に基づきまして、本日の議事を進行いたします。
1つ目の議事は、才徳兼備の人づくり小委員会中間報告です。
まずは実践委員会を代表して、また小委員会の委員長でもあります池上副委員長から中間報告の御説明と実践委員会の御意見の御紹介をいただきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。

池上副委員長： 池上でございます。よろしくどうぞお願いします。
これから15分ほどの時間をいただき御説明を差し上げたいと思っております。

本日は、矢野委員長から実践委員会を代表して出席するようにと指示を受けましたので、私がここに座っております。というのも小委員会の委員長を仰せつかっておるものですから、小委員会の中間報告は池上がやれということで命を受けたのだと考えております。

さてその小委員会、昨年5月から議論を重ねてまいりました。11月25日の実践委員会で中間報告を行ったところでありまして。実はその後も12月24日、クリスマスイブの日に第5回の小委員会を開催して、実践委員会からの御意見を小委員会で共有しました。そして、現在最終報告へ向けた議論を進めているという段階であります。

本日は、中間報告の内容とその中間報告に対して実践委員会の皆さんからいただいた御意見について、ここ総合教育会議の場で御説明をしたいと思っております。

それでは、資料を見ながら話を聞いていただければと思います。

資料の1ページ、資料1を御覧ください。

この才徳兼備の人づくり小委員会というのは、実践委員会の提案機能を高めるために、今年度新たに実践委員会の下に置かれた委員5人の極めて少数精鋭メンバーで行っている組織であります。

3のところ、一番下の表にありますように、私のほかに教育分野が専門の大学の先生方がお二人、それから人材育成の分野で活動されている民間の方が営利部門と非営利部門それぞれ1名ずつという5人です。また、年代も30代から60代まで幅広く、また、ジェンダーバランス、県内の東中西の地域バランスも踏まえて委員をお願いいたしました。

実はこの委員会、極めてアクティブかつダイナミックな議論をしております。ある委員の方は、何か公的な機関の委員会というよりも池上ゼミで勉強しているようだというふうに発言されておりました。非常にダイナミックに議論が展開していくのです。私も進行を担当していてわくわくすることが多いです。

さて、矢野委員長から取りまとめを行うようにと指示を受けて、1にありますように、「新しい時代に対応した「高等学校教育の在り方」」をテーマに議論を進めているところであります。

これまで、2の表にありますように、5月、7月、9月、11月、12月の5回会議を行ってまいりました。第1回はウェブ上で皆さんがどんな活動をしているかとか、どんな思いを持っているかということ共有した次第であります。

その後、より実態に即した議論を進めるために7月から8月にかけて、県内の高校生と事業所に対するアンケート調査を行いました。また、10月には、浜松市内の高校2校、後で御報告しますが公立の学校1校と私立の学校1校の視察を行いました。

最終報告については、2月に予定されている第4回実践委員会で報告するスケジュールを考えております。

それでは、2ページの資料2を御覧ください。

中間報告の内容ですが、まずIでは、「本県の高等学校教育を取り巻く状況」として、議論をする上で認識しておくべきポイントについて整理しております。急激な社会変化、少子化の進行等です。

急激な技術革新の進展、少子化の進行に加えて新型コロナウイルス感染症の影響を前提に考える必要があります。とりわけ教育現場においては、今年度当初、授業が成立しないという未曾有の事態が発生しましたが、しかしそれは別の見方をすれば、ICTを活用した教育の実践というこれまでやろうやろうと言いつつなかなかできなかったことが現実が始まった、そういうきっかけでもありました。

こうした中で、本県においても魅力ある高等学校づくりを進めているほか、国においても教育改革が進められているところであります。国における方向性も静岡県の方角性と大きく違うところはないなというのが私の率直な印象です。

また、地域から高等学校に対するニーズも多様化してきております。県内の高校生と事業所に対するニーズ調査の結果も踏まえた議論をこれまで行ってまいりました。

ここで、ニーズ調査の結果についてポイントだけ触れたいと思います。

少し飛びますが、資料の6ページ、資料4を御覧ください。

回収率は、高校生が92.6%、事業所が33.2%となっております。高校は学校を通してやったので、非常に高い回収率になります。

11ページをお開きください。少しまた飛びます。

高校で身に付けたいこと、また事業所側から見て高校で身に付けてほしいことが対比されてまとめられたグラフです。

これを見ていくと、例えば「進学に役立つ学力」というのが、高校生では53%、非常に高いです。それに比べて事業所がそれを求めるのは何と3%、極端にこういう落差があるわけです。

一方で「自ら考え行動できる資質や能力」あるいは「他人を思いやる心など豊かな人間性」というところは、事業所の方が非常に高

くなっております。こうしたギャップがあるという認識も大事だと思います。

ただ1つここで誤解のないように申し添えなければいけないのですが、事業所は知識は必要ないと言っているわけではありません。進学に関する細かいことよりも、むしろ生身の社会と切り結んでいくときに求められる能力をしっかりと高校の時代に身に付けてほしいということだと私は理解しております。

では、14ページ、地域連携についてです。

これも非常に興味深いデータになります。地域や企業等が関わる教育に興味のある高校生はどのくらいいるかというところと約6割です。それに対して事業所の場合は何と9割以上が高校生と地域や企業に関わるべきだと、そういう機会は必要だというふうに、高校生はまだ6割くらいですけれども、事業所は9割がその必要を感じており、ここも落差があります。

それでは、18ページをお開きいただけますでしょうか。

地元への貢献の意欲ということですが、これを見ていくと、下のグラフですけれども、いずれは静岡県で暮らしたいと考えている高校生は約66%、3人に2人ということになっています。3人に2人は静岡でいずれは暮らしたいと考えているということですが。

それでは、ちょっとまた戻ります。2ページのところに戻っていただけますでしょうか。資料の2ページになります。

中間報告の内容の続きになります。

こうした状況を踏まえて、IIでは、本県の高等学校教育における課題について4つの項目で整理をしています。

高校生の社会や自分に対する意識を高めて、実社会で様々な課題に挑んでいく力を育てていく必要があると考えています。そのためには、学校内で提供できる学びでは不十分だというのが私たち委員の共通の認識です。子供たちの学びを学校外からも支えていく仕組み、またそういった運営体制をつくっていく必要があるほか、地域の実情に応じた多角的な検討が必要になると考えております。静岡県というのは非常に豊かな場所なので、学校の外にある地域の資源をうまく学校教育につなげていく、それが必要ではないかという考えです。

この地域の実情というのが非常に大事で、学校のある地域にどういった資源があるのか、どう結び付けるのが有益なのかということ意識しなければいけないと、これも大事だと思います。これも別の言い方をすれば、どこかでうまくいっている成功事例をパッケージ化してあちこち当てはめてもうまくいくとは限らない。やはり地元のリソースがうまく生きていく、そして学校側から見たとしてももちろんですが、地域から見ても、ああ学校とつながってよかったねというような、ウィン・ウィンの関係をつくっていかないと持続可

能な枠組みにはならないのではないかと考えております。

次、下の部分になりますⅢ、これは高等学校を取り巻く状況や課題を踏まえて、高等学校教育に求める姿について整理をしております。

静岡県では、「美しい“ふじのくに”」の未来を担う「有徳の人」づくりを進めておりますので、高等学校教育に求める姿を「次代の担い手の育成」といたしました。具体的には、多様な学びの場を提供する中で、自ら考え挑戦する力を育てていく必要があると考えております。

その上で、静岡県でいずれ暮らしたいという生徒は、先ほど見たとおり66%という結果もあります。様々な形で静岡県へ貢献する多様な人材を育成していく必要があるだろうと考えております。その実現のためには、「地域社会に開かれた教育」、そして静岡県という「学びのフィールドを生かす教育」が求められると考えております。高校生にも地域の豊かさを肌で感じて知っていただきたい、これが私たち委員の共通した考えになります。

では、3ページを御覧ください。

3ページ、中間報告の続きになりますが、Ⅳ、「静岡型高等学校教育の実現に向けて取り組むべき施策」として、求める姿を実現する上で必要な施策、具体的な取組、小委員会での議論を踏まえて整理をしました。

まず1のところでは、基本的な施策の方向性を2つにまとめております。

基本的な方向性としては、学校外の様々な教育資源も活用した学びの提供、地域の実情を踏まえた先駆的な取組の実施、地域と連携した授業づくり、外部の多様な人財が関わる仕組みや地域連携活動を行う生徒が評価される仕組みの導入といったことが出されております。

さらに、実は小委員会では、そういった地域連携活動に関わっていく先生方の評価というのも大事なのではないかという議論も出てまいりました。

2のところ、「基本的な施策を進める上で必要となる具体的な取組」ですけれども、3点上げております。

取組としては、多様な主体が学校現場に関われる仕組み、あるいは教育現場と外部人財が交流し学び合えるプラットフォームとともに、それをコーディネートする人材を配置、機能させていく仕組みが大事だと。ここはさくっと書いていますが実はすごく大事なことを言っていて、学校の中だけで人材育成をしたりカリキュラムをつくったりしてもうまくいかなだろうと。地域の側にもこういうことに関わってくださる方を育成して、そして地域と関わっていただく、そこをうまくつないでいくコーディネーターが機能して初めて

子供たちにとっての豊かな学びが実現するのではないかということです。

今回小委員会に民間の方が入っていらっしゃいます。人材育成で営利、非営利それぞれの部門で生の現場で関わっている民間の方がこういった視点を非常に強調されていたという点もここで私申し述べておきたいと思います。

さて、コーディネートする人材は、地域が発掘して育てていくという枠組みもとても大事です。また、教員自身の意識改革や教員が地域と連携した取組に関わっていくための時間の捻出も大事で、研修の実施や、あるいはICTを活用した教員の業務改善といったことも派生的に提案をされております。

次の3、これは「取組を確実に進めるための方策」ということですが、課題を短期、中期、長期に分けて段階的に着実に実施していく、それが必要だという認識を持っています。

短期的には、モデル校による実施を含めて可能なものから実行に移していくという必要があるでしょう。また、中長期的課題というのは、多くの場合、これは中長期的課題だよねとラベルを貼ってどこかにしまってみんなが忘れてしまうのですが、それでは駄目で、どの検討のテーブルでそれを検討するかを明確にする。それから、バックキャストिंगという言葉がありますけれども、将来こういう姿に静岡県的高等学校がなってほしいというその像を明確に描いて、そこから逆算してこの段階までにはこれ、この段階までにはこれをやる必要があるの、それを誰がやるのというところまできっちと検討の方を明確にしていくと、そこまで私たち委員会では考えておりました。

さて、こういったものを踏まえて12月24日の小委員会では、この3のところを中心に議論を行いました。そこにさらに3点ほど12月24日に意見が出てまいりました。

1つは、地域と連携した学びを行った生徒、外部の専門人材や担当教員が社会的に認知される仕組みが不可欠だ。つまり一生懸命やっても何か全然評価されないと生徒もやる気なくするし、地域の人たちも何だかなと思うし、先生方も余計な仕事が増えるだけだなと嫌になってしまう。それを社会的に認知していく、そういう仕組みにはどういったものがあるか、これを考えなければいけないと、これが1点。

2点目がモデル的な取組を形骸化させない施策が必要だと。どうしてもモデルができてしまうとそれを転がせばいいみたいになってしまうのですけれども、形骸化させずにそれぞれの地域に即した形でいかにうまくフィットさせるか、こういう施策が必要だということ、これが2点目。

3点目が、短期、中期、長期だけでなく実施課題と検討課題に分

けるべきだという意見がありました。

また、県教委が行う施策となるとどうしても教育の場での課題が中心になりがちですが、さらに大学や経済界への要望等も盛り込むべきだという意見も出てまいりました。つまりステークホルダーのそれぞれがどんな役割を果たして関わるべきか、こういう全体像を思い描かないと、学校の中だけではこういった新しい枠組みができないのではないかという話であります。

1月25日に今年度最後の小委員会を予定しております。本日の総合教育会議での御意見も踏まえて最終報告を取りまとめてまいります。

次に、学校視察について簡単に御報告いたします。

4ページ、資料の3を御覧いただければと思います。

小委員会と事務局で県立の浜松湖北高校、それから私立の浜松学芸高校へ行ってまいりました。

時間が限られていますので、あまり詳しい説明はできませんが、湖北高校は、普通、農業、工業、商業という4つの学科が1つの学校の中にある非常に特色ある学校です。「湖北MAGIC株式会社」という模擬会社をつくって生徒が主体となった企画、運営、広報を行っています。

当日は、担当教員、企業の方のお話を伺ったほか、商業科の授業にも少し加わって生徒との意見交換をしました。学科間連携や地元企業との連携によって、生徒には地域に貢献したいという強い思いが育まれていることが分かりました。

続いて、5ページを御覧ください。

こちらは浜松学芸高校です。カリキュラムの中に探究活動を取り入れて、地域の人とグループ活動を行う「プロジェクト学習」など課題解決学習を行っております。

中心となった先生方や授業の見学、生徒との意見交換を行いました。生徒からは、教科の学習が探究活動に生かされ、また教科と探究活動の深い関わりを感じるという声がありました。つまり教科と探究学習は別のものでなくて、もっと踏み込んで言うと、探究学習は教科にとって時間を食ってしまうマイナスのものではなくて、お互いに補い合う非常にポジティブな関係にあるのだということを生徒の声として聞きました。

これは非常に大事なことで、どうしても教科学習が重視されてしまうと、探究学習だ地域連携だということとそんな時間があつたら数学の問題を解けと言われてしまうのですが、そうではない。補完関係に当たり、あるいは地域の学びに関わることで教科学習の強い動機づけができたりする。こういうダイナミックな関係にあるという認識をぜひここで改めて私たち共有したいと思っています。

いずれの学校においても、生徒が教員の指導下で自主的に取り組

んでいるほか、地元の企業の方々も熱心に関わってくださっておつてとてもすばらしい参考になる事例だなと思いました。

中間報告に関する説明は以上です。

その上で、実践委員会の皆様からこの中間報告に対していただいた御意見を簡単に紹介します。

19ページの資料5を御覧ください。

まず、ICTに関して、早くハード面を整備すべしと、それを強く望むという声、あるいはICTをもっと使って想像力を学ぶ機会をつくってほしいという御意見がありました。

御指摘としては、置き去りにされている子供たちをいかにやる気にさせるかが大事だというもの。あるいはさらに幅広い御意見として、新しい取組を英語で発信できるような、そして世界と連携できるようなレベルで目指していくとよいとか、農業と社会を結びつけて新しい取組ができるのではないか。あるいは自ら考えてどう組み立てていくのかという力を身につけられるような教育が小学校から必要だというような御意見もいただきました。

また、単位化したりカリキュラムに入れたりして企業や社会で経験してもらえると見え方が変わってくるだろう。授業や教員の教育の仕方が相当変わってくるので、県も国の流れに沿ってやるべきだといったような新しい教育の流れに関する御意見がありました。

次に、生徒にきっかけを与えるサード・プレイス、第3の場ということですね、家と学校とその次の場としてサード・プレイスを地域の中につくって企業も参画すれば、生徒の意欲の格差が解消できるのではないか。まちづくりと学校づくりは両輪で大事だ。教員が地域を理解することで生徒の活動しやすい環境が整うといった学校と地域のつながりに関する御意見がありました。

20ページを御覧ください。

多様な大人や多様な生き方、こういったものを中・高生のうちに様々な形で見てもらふとよい。中には失敗するというのを極度に恐れる若者たちに対して、失敗してもいいんだよというような生きざまを見せるのも大事だという御意見もありました。どのように個々の感性が育っていくのか考えていく必要があるといった多様性に関する御意見がありました。

さらに、部活動も授業として捉えて指導できる仕組みを静岡モデルとしてつukれないか、こういう斬新な御意見や、子供たちに努力する習慣を身につけさせることが学校の仕事だ。生徒自身が地域の方と関わって何がどう変わるかが大事だ。どこに行っても通用する力という土台を身につけてほしいといった御意見がありました。

またちょっと面白い御意見としては、古典や昔からある研究等に対しての重要性を再認識するような授業を中学、高校で取り組んでほしい。受験を通して自ら考える力は十分つくはずだ。昔からやっ

てきたことをしっかりやっていけば自ら考え行動することは十分できるといった御指摘もありました。

最後に、小委員会での議論を来年度も進めて、実践委員会の意見として総合教育会議に反映していく形をつくりたいという矢野委員長からの御意見があつて実践委員会での総意となりました。

少し長くなりましたが、私からの報告は以上になります。

川 勝 知 事： 池上先生、ありがとうございました。

池上先生には才徳兼備の人づくりの小委員会のアクティブにしてダイナミックな御報告、並びに実践委員会におけるそれに関わる御発言等を御紹介いただきまして誠にありがとうございました。

やはり一番面白いのはアンケートですね。面白いのがたくさんありましたが、実社会と高等学校の子供たちが考えているイメージが違うということが明確になったのが大きなことではないかと思いました。また、地域との関わりもそうですね。

さて、ただ今の御報告につきまして、御意見をいただきたいと存じます。どなたからでもよろしいですが、いかがでしょうか。

それでは、藤井委員からお願いいたします。

藤 井 委 員： 池上先生、中間報告ありがとうございました。

報告を伺っていて、360度からいろいろな課題に切り込まれて、なおかつ働く意義を検討された結果が出ていると思います。どっちかというところと中間報告というよりも、もう最終報告の骨格がこれで出来上がったというふうに受け止めております。

報告を伺っていて改めて感じさせられたのは、今までの日本の教育が知識偏重型であつて、なおかつ同質性を求めるような教育をしてきた、その弊害が極めて明らかに浮き彫りにされていると受け止めました。

高校ということではいろいろ御検討されたわけですが、報告を伺っているともうこれは小学校、中学校、高校、要するに学校教育全てに当てはまるような内容になっていると受け止めました。

それで、アプローチの仕方に関しまして、どちらかというところと現状をベースに課題を抽出されて、その中から全体をまとめていくという手法を取られています。一方、将来、10年後、20年後、50年後にどういうふうに世界が変わっていくって、その世界の中でしっかりと生き延びていくためにはどういう教育が必要かという将来を見通した上で、それを逆算して課題を抽出するという手法ももう少しあってもいいかなという気がいたしました。

それから、アンケートに関しては、生徒と社会ということではアンケートを取られたのですが、ちょっと先生の考え方だとか思いだとか捉え方というのが見えてこないの、そこはもし余裕があれば

ひ切り込んでいただきたいなと思いました。もちろん保護者もということになります。保護者は取りあえず脇に置いて、やはり先生方がどういう価値観を持っているかということをしつかり把握する必要があるような気もいたしました。

以上です。ありがとうございます。

川 勝 知 事： どうも藤井委員、ありがとうございました。
それでは、今度はフェース・ツー・フェースの方でどなたか。
渡邊委員、よろしくをお願いします。

渡 邊 委 員： 私も今の報告を伺いまして、本当に明るい未来を見せていただくような、やりがいのある施策をたくさん提案していただいたと思っております。

実は、私自身も所属していますNPOで、2019年中心に、今、皆さんの机上にもお渡ししていますが、こちらのみしま未来研究所と書いてある冊子にまとめてあるようなアンケート調査を伊豆箱根鉄道沿線周辺で10校の高校の高校2年生と、あと学校の先生方を中心に調査をさせていただきました。

小委員会のアンケート結果とも重なる部分も多くございまして、将来地元に残るかどうかということに対して、迷っているという生徒たちが6割、そして細かい点については先生からも言っていただきましたし後で見ただけならばと思うのですが、特にこの冊子の13ページ、先生方からもいろいろヒアリングをしているのですが、実際に、では地域と学校が連携する上でどんな役割の方が必要かといえますと、コーディネーターの必要性が非常に高いと、やはり先生方は日頃の学力、学校に求められているこれまでの役割としても先生方御自身が今やらなければいけないことがたくさんあるので、それをサポートしてもらおうような役割の方が必要であると。ただし、そういう方をお願いするにしても、なかなか従来の学校活動とは違う分野なので、予算立てというお金の面であるとか、人脈の面であるとか、どういうことを企業にお願いできるのだろうかとか、そういう知識がないので、コーディネーターというような役割の方にぜひ支援していただきたいたいという御意見が多くございました。

そういう部分を考えますと、今いただいた提言にあるようなことをサポートする点を教育委員会としても支援していく必要があるのかなと強く感じました。

私もこの調査を基に、自分自身もキャリア教育コーディネーターとしての学びを始めるに至りまして、その中で一番初めに指摘されて、キャリア教育コーディネーターとしてまず意識しなければいけないという勉強をしたときに、キャリア教育というのは職業観であるとか勤労観のみを育む学習ではないと、今、これからの子供たち

に必要なのは、この不確実、不確定な世の中を生き抜いていく力が大事であるということ、そのためには職業観も大事なわけけれども、それを通じてライフキャリアという部分に関して、どういう生き方をしたいのかということをしつかり考える教育が学校においても広まっていくことが大事だよということを学習いたしました。

そういうことを考えますと、静岡県は非常に有利な立ち位置にあると思います。よく静岡県から出てしまう若者たちの意見を聞くと、静岡県にはなりたい仕事がないから都会に出てしまうのだというような声が多く聞かれております。しかしながら、生きたい生き方ができるという面においては、静岡県は非常に交通の便も便利ですし、昨今コロナのおかげで在宅勤務ということが中心になってまいりますと、だったら静岡県に住むのが一番いいのではないかなというような方もどんどん増えておりますので、そういう部分、生き方を含めたキャリア教育ということが進んでいきますと、ますます静岡県が活発になっていくのではないかなという思いがいたしましたので、ただ今いただいた御意見を基に、その部分においても官民連携しながら進めていければと考えた次第です。

以上です。

川 勝 知 事： 渡邊委員、ありがとうございました。
それでは、ウェブの方の委員はどなたか。
それでは小野澤委員、お願いします。

小 野 澤 委 員： 中間報告ありがとうございます。
資料2のⅢの地域社会に開かれた教育の部分で、また他の地域でもやはりそういうことをすごく興味を持っている都道府県がありまして、2月に、大阪教育大の先生と一緒に地域のスペシャリストを学校教育現場の授業をさせてみたら実際どんな問題があるのかという研究で僕に声がかかって、体育の授業をやってくれることになっているのです。

そこでは、スペシャリストだけれども教職を持っていない先生としての民間のスペシャリストが授業をやった時の単位認定の問題だとか、その辺りが実際どうなのかというところはやってみなければ分からないという部分をやってみる、そういう速度感の地域もあるので、そこでの問題がまた見えたら、僕の方でも報告できる場があれば報告したいなと思っています。

実際自分のところでは以上になります。

川 勝 知 事： 非常に重要なポイントをいただきましてありがとうございました。
それでは、後藤委員にお願いしましょうか。

後藤委員：

私はちょっと切り口が違うのかもしれませんが、経済界において経済団体の役員もやっていたので、いわゆる人口減少問題、地域創生という中での高校教育という在り方を見た時にどのような位置付けになるのかというような、そんな感じで池上先生のまとめを伺っていました。

現実の高校生というのは、現実問題としては九十数%が実家から通っていらっしゃるのですよね。ですから、ちょっと言い方はいけないかもしれないけど、まだ非常に基礎的な教育の段階で、以前は中学を卒業して、それからすぐに就職というような段階になっていたと思うのですが、今は昔の中学が高校、あるいは場合によっては短大とか大学もそういうふうにステージが変わってきているのではないのでしょうか。そういう意味では、高校というのは現実としてはお父さんやお母さんがいろいろな意味でその生徒を応援して成り立っているという、本当の自主独立という形ではないと思うのです。ですから、そういう目で高校生を見る必要があると思います。

静岡の場合にも、最近のデータとかは持っていないので記憶に基づいた話で申し訳ないのですが、恐らく6割から7割までいかないかもしれないけれども、短大まで含める、専門学校とかを含めると高校から進学している率というのはそれぐらい高い時代になっていると思います。それで、静岡の場合では、何で人口減少しているのかというと、大学で東京や関東地区、首都圏へ行った人たちがなかなか静岡へ就職で戻って来られない。特にその内容を見ると女性が多いのです。男性はまだ戻って来ているのです。それだけの企業があるということだと思うのですが、ところが女性はなかなか地元就職先がない。首都圏の企業に勤めるといろいろな事情でなかなか地元へ帰って来るということができないところが、要するに若年者の人口流出が、県も市も同じ状態ですけれども、みんな人口が減ってってしまうということだろう思うのです。

ところが高校生というのは、先ほど申し上げたように、要するにある意味では実家において甘えている部分がありますから、首都圏大学に対する一つの夢みたいなものがあって、若者ですからその刺激を受けたいということで、いろいろな理屈はつけて結局は東京へ行ってみたいと、簡単に言うとそういうことなのです。

私の会社へ勤める方にも、今はちょっとコロナで難しいのですが、面接の時に何でその大学へ行ったのかということ聞かせてもらうと、女性でも自分の希望した科目が、何とか先生のところが東京の何とか大学でないとならないからというように言うのですが、本当にそれが目的なのか、あるいは東京なので、それは若い方だから芝居も見たいし音楽も聴きたいし、あるいは買物もしたいし、そういういわゆる都会に対する興味というのはどうなのだとすると、本音はそういうところなのだと思いますという方がほとんどなのです。

建前と本音と両方見ないといけないと思うのですが、私は役員をやっている時も感じていたのですが、そういうことを止める必要はないと思っています。静岡にいて実家を離れて、本当に自分で下宿したり寮に入ったりして、それは2年間か4年間でも独立してみても、言葉で言うと武者修行ですよ、1人でやってみると。そこで失敗もするし勉強もするし、そういうことによって人間形成ができていくので、問題は那些人たちが静岡へ戻って来てくれるような仕組みをつくっていく方が大事なのではないかと思います。

無理矢理に静岡に、地元に残れということをやってもそれは無理があるのではないだろうかとは私は思って、例の新幹線の定期代の補助とか、ああいうのも今考えればJRさんも、ひかりではなくてこだまなんかもう半額にでもしてくれればよかったと思うのですがね。学生はそんなに時間はあんまりうるさくはありませんから、そういうことを言ったのです。JRにも言いましたが結局聞いてくれなかったけれど、一応静岡市としては補助金は出すようにやって、今でも恐らく続いていると思いますけれども、そういうような意味での高校なのです。

だから、私はこの先生の話のように、高校で勉強もやることも結構だし、スポーツを一生懸命やることもいいし、半分以上はお父さんやお母さんが応援してくれているわけですから、だからそれはもう大いに甘えたらいいと思います。それで次のステップへ行くための準備期間としてそれだけの人間形成の一助ということで理解されればいいのではないかなと思っています。

企業と、いわゆる地元産業界と学生とのアンケートの結果というもの伺って、私の一つの提案ですけど、この間お気づきになった方もいらっしゃると思うのですが、奨学金について、今度、企業が学生に代わって返済ができると、今までできなかったのです。それができるように法律改正といいますか、あれは奨学金の制度の変更がということでしょうか。

ですから優秀な生徒さんには、例えば静岡の学生さんに、静岡の場合、静岡銀行さんもヤマハさんもスズキさんも大きい企業がいっぱいありますから、だからこの学生さんは卒業したらうちの会社へ来てくださいと、その代わりに奨学金の返済の支援はお手伝いしましょうとか、そういうようにある程度予約するとか、そういう形でその学生さんたちに勉強してもらおう。学生たちも、卒業したら仮にヤマハへ入ろうというような気持ちでやれば、学校で勉強しているときも力が入ると思うのです。ヤマハにとってプラスになる。それでは理工学部へ行ってそこでそういう勉強をしてこようとかですね。

これは余裕のある企業とそうでない企業とありますから、なかなか一概にはいきませんが、せめてそういう大きな企業から、何かそ

ういう静岡方式でいろいろトライしてみて、それでその人たちに4年たって、あるいは修士まで行けば6年ですけど、あるいはドクターというのもあるかもしれないけれども、それでまた静岡へ戻ってきていただくというような、女性もですけれども、そういうことをやってみたらどうだろうかなと思った次第なのですが、ちょっといろいろまだありますけれども、話しをすると長くなってしまいので、一応そういうような感想だけ述べさせていただきます。

ありがとうございました。

川 勝 知 事： どうも後藤委員、多岐にわたる御提言ありがとうございました。それでは、伊東委員いかがですか。

伊 東 委 員： 池上先生、丁寧な理論とまとめをありがとうございました。

コーディネーターのことを御指摘されていましたが、私も非常に重要なポイントではないかなと思っています。コーディネーターをどこから探してきてどうやって育成していくかというのが、本当にちょっと集中してみんなで考えなければいけない課題の一つかなかなと思っていますけれども、1つヒントになるのが、私も以前、情報学部に行った頃にいろいろな企業の方とお話しする中で、企業を辞めた後、学生、後進の指導だったらば手弁当でも手伝うよというやつっぱいいるぞという話をいただきまして、IBMの人事に掛け合って教育を手伝ってくれるような人を探したりしたことがありました。

確かに声を掛けると気持ちよく応じてくださる方というのがたくさんいらっしゃるんですけど、本当に手弁当で、家に居てもやることないからというような感じで来ていただけるのです。そういう人たちの活用というのも含めて、企業と一緒に子供たち、高校生を育てるということの重要性もここで指摘されていますけれども、そういう企業を経験して、なおかつ後進の育成に関心を持っていただける方、そういう方々というのを少し探してみるというのも良いやり方かなと思います。

それからもう一つ、学校の視察の報告も非常に興味深く拝見させていただきました。この後のテーマの「未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進」に関するいろいろな高校のいろいろな取組の資料を送っていただきましたけれども、それも拝見して思ったのですが、我々が高校生の頃と比べると、今の高校って本当にいろいろな取組というのを熱心にやっていたらっしゃると思います。

そういう良い実践例が世の中に広く周知される機会がちょっと少ないのかなと思ひまして、せっかく、これからもいろいろな特色を出していかなければいけないのですが、今もう既にいろいろな学校で取り組んでいられる良い実践例をもう少しきちんと世の中に紹介

していく、一目で分かるような形で紹介していくということができないかなと感じました。

以上です。

川 勝 知 事： 一当たり教育委員の皆様方から、実践委員会とはまた違う御感想をいただきまして、お聞きになって池上先生いかがですか。

池上副委員長： ありがとうございます。

皆様から大変深いコメントをいただいて、私自身考えることがたくさんありました。

特にコーディネーターというキーワードについて、今の伊東先生からの御指摘も含めて、実は今日の報告の中に入れていないのですが、小委員会の中で、今後、先生方の場合、リタイアした後の一つの関わり方として学校のことをよく知っている立場からのコーディネーターとなっていく、そういう学校の先生方の退職後のキャリアモデルの一つとしてつくっていくというような視点もあるのではないかなということがありました。

というのは、地域の方々って学校教育の中を知らないの、単位認定するという時に、さっき小野澤先生から単位認定、その人たちが授業をやってどうなるのという話がありましたけれども、そういうテクニカルなことがやっぱり分からない。なので、例えば地域の側から人材を発掘してきて地域のことをよく知っているコーディネーターと、学校の中をよく知っているコーディネーターが二人三脚でつないでいくような形ができるとよいのではないかと、私自身は小委員会の議論を聞いて思っています。

ですから、コーディネーターといったときに、1人で全部つながって結構難しいのではないかな。それをどういう人材をどうやって育てて、どういうふうにインセンティブを持ってもらうかというような辺りは来年度の話かなと思います。

ただ一方、今年度の議論でとっても興味深かったのは、高校生などと連携している企業の方は、関わった社員の方がとっても生き生きした顔をするのだという報告を受けて、つまり何か企業が高校生にやってあげるのではなくて、実はそういう連携の枠組みがあることで企業側にも大きなポジティブな影響があるということ、そこを考えると、今の伊東先生のお話で周知する機会が大事だというお話がありましたけれども、例えばある高校とある企業さんが連携して、こんなポジティブな成果がありましたというのを、企業側から、例えば経済団体の集まりの中で企業の皆さんに、経営者の皆さんに報告する機会などがあると、うちもやってみようかというような視点ができてるのかなと思いました。

つまり学校の中で先生方を発掘する、地域の中で地域人材を発掘

すると同時に、連携するもう一方の当事者である企業の皆さんにもこの連携がどんな豊かな実りを企業側にもたらし得るかという話をはっきり伝えていくというのも大事なのかなと思います。学校、地域、企業、ウィン・ウィン・ウィンの関係ができてくればとても豊かな幸せなことなのかなと思って聞いておりました。

川 勝 知 事： どうもありがとうございました。

冒頭、藤井委員から学校の先生の思いというのが大事だということでしたが、それを受けて渡邊委員からは、やっぱりこのコーディネーターということに対しての関心が高校の先生にもあるということが分かりまして、ただそのコーディネーター、例えば小野澤委員のように地域のスペシャリストとして行くと、そのときに単位がどうなるかということで、確かにこの問題は非常に重要な論点だと思います。

ですから、このコーディネーターをどのようにという時に、一応コーディネーターとしては、高校の先生をリタイアした方々、この人たちがよいのではないかという、これをやると組織ができますからそういうものを地域としてつくるかどうかという御感想を池上先生からいただきました。

それ以外、後藤委員からは、男子生徒と女子生徒、それから甘えの構造、奨学金、こうしたものも出ました。ただ、みんなが甘えているわけではなくて、例えば小野澤さんも典型的な例ですけれども、もう早くから何をするかということを決めている、もちろんこれは親御さんの援助もありますけれども、主体的に何をしようということの意味を持って突き進んできた人もいらっしゃるし、そういう青年もいます。

ですから高校生全体をどう考えるかというのは、簡単には言えないというところがありますが、とにかく資金的ないろいろな支援とかそういうものについての制度づくりというのは、先ほど奨学金の話が出ていましたけれども、それは極めて重要な御提言だと受け止めたわけでございます。

教育長先生、この件について何か御発言ありますか。

木 苗 教 育 長： 皆さんからいろいろためになると思いますか、すぐにでも実施してみたらどうかというお話もいただきました。

教育委員会では、各小学校、中学、高校を訪問しておりますので、そこで生徒さんからも聞きますし、もちろん先生方からも、それからPTAの方々からも、先ほど来ありましたようなことも含めていろいろなお話を聞いております。

それからもう一つは大学・高卒者の、静岡県に短大を含めると20大学ぐらいありますので、そういうところの会議をやってもやはり

幾つか出てきます。

それから、僕は教育者になってから、保育園、幼稚園、小学校、中学、高校、大学というようなことで、良い意味で連携しながらいこうよということ、これは短大も入っていますけれども、そういうようなことでやると、俗に言う静岡方式なんですけれども、これで、特に最近は海外からも増えていますので、夜間中学もそうですけれども、何かこれをもう一度整理していくと、今、いろいろな面で、そしてそれを学校で言えばあとは就職がありますので、そういう点でできるだけ静岡が良い意味でのルールづくりといいますか模範になって、静岡を活性化するのもそうですけれども、むしろ日本もという発想をするともっと良いのかなと、そんな感じもしております。

今日お尋ねしていて、大分いろいろアイデアが出てきたので、また皆さんとゆっくりお話ししたいと思います。

以上です。

川 勝 知 事： どうも木苗先生、ありがとうございました。
では藤井委員、どうぞよろしくお願いします。

藤 井 委 員： 私が申し上げる立場にあるかどうか分かりませんが、今、池上先生もお話しになったコーディネーターの件ですけれども、これは私の理解では教育長の御提唱で、教職の人材バンクを今年度中につくるという新たな取組が既に動き始めていると思います。企業関連であれ、教職関連であれ、人材をプールするような仕組みがこれからできると思うので、その中でどうやって学校の現場と地域をつなげていくかということが検討されるはずで、これは多分事務局が一番よく知っていると思います。私はそれ以上のことは知りませんが、せっかくの機会なので、そういう話も出てもいいかなと思えました。

川 勝 知 事： この件については、実践委員会でもスポーツの分野について人材バンクを数年前からつくりまして、ただスポーツといっても、小野澤さんのような本当のトップクラスの方と、それから大学でちょっとサッカーをやったとかいろいろな人がいるので、人材バンクをつくるということの難しさというのも一方で我々痛感したという経験がございます。

この点について池上先生からコメントありますか。

池 上 副 委 員 長： やはりコーディネーターというところに収れんしていく話題だと思えます。生涯学習という観点から見た時に、地域の方々がこれまで家と会社との往復だけだったところを、地域とどう関わっていく

かは、すごく重要なチャンネルになっていくと思います。

一方、専門性を持ったお仕事をされてきた方々が子供たちに関わっていくというのは、先ほどの伊東先生の話ではありませんが、恐らく気持ちとしては手弁当でもやりたい、やってみたいという方々が多いと思うのです。

ですから、地域の中にいる方々を発掘して行って、つなげていく。先ほど申し上げたように、学校を退職された先生方の中で、そういう地域と関わるようなことに関心を持っている志向性を持った人がいて、それで、民間から出てくるコーディネーターと学校から出てくるコーディネーターがうまくコラボレーションできていくような仕組みを、ぜひ静岡方式でつくっていきけるとよいなと私は考えています。

川 勝 知 事： 明確な御提言ですね。ありがとうございました。

この点について、何か事務局から意見ありますか。コーディネーターについて、制度的に仕組みをつくるということですが。

事 務 局： 義務教育課長 宮崎と申します。

コーディネーターというよりも、今出た教職員人材バンクについて簡単に御説明させていただきたいと思います。

現在考えておりますのは、もともと各小・中学校で講師が足りないということで、そもそもは学校の講師を補うために、まず県の電子申請システムを使いまして、幅広く県民の方に登録していただく。その際に、教員の免許を持っている方だけではなくて、スクール・サポート・スタッフですとか、部活動指導員ですとか、いろいろ幅広く募って、そういった方を登録していただいて、各学校で活動いただけるということで、そういったプログラムというか、構想を今練っている段階で、3月から稼働させていくこととして現在検討しておるところでございます。

川 勝 知 事： では、一応こういう形で動き始めているということですね。

それから、もう一つの論点は後藤委員から出たものですが、武者修行ということ。ですから人生、ライフステージに応じて生涯学習ということで、これは渡邊委員からも、一生の間でどのように教育機関を活用するかというのと同時に自己研鑽に励むかということなのですが、武者修行時代を高校、大学生までと見るのか、あるいは「30歳になったら静岡県！」ということで、向こうの企業で大きな組織の歯車の一つだったと。だから地元に戻ってきたいと。お父さん、お母さん、あるいは友達、いろいろなことを考えて、30前後に戻ってくるという一つの転機を迎えるということですから、30前後までは武者修行というような、人生100年の時代ですか

ら、そういう見方も可能なのですね。

武者修行というか、人生失敗しても、若い時は受け入れるという社会でなくてはならないと思うのですが、ある一定の年齢を超えると自己責任になるかと思えますけれども、ある程度若い時には修行させるというおおらかな形の方がいいと思うのですが、これは問題提起ですね。幾つぐらいまで、静岡県ではいろいろな失敗をやっても寛容して、寛容的に迎えると。こういうような形が望ましいと思います。これは県で進めているものでございます。

小委員会における御報告について、他に御意見ございますか。

よろしいですか。

それでは、また時間があれば御発言賜ることにいたしまして、もう一つ議題がございます。

次の議題に移ります。

未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進についてであります。

事務局から資料の御説明をお願いします。

事務局：

それでは、事務局から御説明をいたします。

資料は21ページになります。資料6を御覧ください。

協議事項は、未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進ということでございます。

論点を2つに分けてございまして、1つ目が才能を発揮する人材の育成としております。一人一人の能力、適性、成長に応じた多様な学習機会を提供し、個々の能力をさらに伸ばしていくために、具体的にどのような取組が考えられるか御意見をいただきたいと思っております。

2つ目の論点につきましては、グローバル人材の育成としております。グローバル化が進展する社会において、世界に貢献できる人材を育成するために具体的にどのような取組が考えられるか、御意見をいただきたいと思っております。

いずれの論点につきましても、それぞれに記載しております検討の視点なども踏まえて御意見をいただければと思っております。

次の22ページ以降の資料7につきましては、論点に関する県の取組等についてポイントをまとめた資料になっております。説明は割愛いたしますけれども、別冊の参考資料の関連ページも記載しておりますので、適宜御参照いただきたいと思っております。

それから、本日お手元に、カラーのもので「新時代の「課外活動」への挑戦！」という掛川未来創造部Paletteに関する資料をお配りしております。この取組は、地域団体が主催する全国初の文化系地域部活動でございまして、準備段階の平成29年度から県の文化プログラムとして採択、支援しているものでございます。今年で3年目となりまして、部活動の先進的な形として活動は着実に定着して

きております。

それから、もう一つグローバル人材の育成に関しまして、ふじのくにグローバル人材育成事業の成果報告も併せてお配りしております。こちらも併せて適宜御参照いただきたいと思います。

簡単ではございますが、事務局からの説明は以上でございます。

川 勝 知 事： 簡潔に御説明いただきましてありがとうございました。

続きまして池上副委員長から、実践委員会の御意見を御紹介いただきながら、池上先生の御意見も頂戴したいと存じます。

池上副委員長： 今度は実践委員会の副委員長の立場で、実践委員会での御意見を皆様に御紹介したいと思います。

資料の26ページ、資料8を御覧いただきたいと思います。

まず、地域の困り事について、取り組むところまでは総合学習でやってほしい。自分の進路や受験に関わらなくとも、SDGsを総合学習で進めるとよいといった総合学習の必要性に関する御意見をいただきました。

次に、才能を発揮する人材とグローバル人材の育成については、静岡県内の人たちだけで考えていても難しい。失敗してもよいので、教育行政に関わる人のマインドセットを変えなければ、縮小していく政策しか出てこないのではないかという厳しい御指摘や、トヨタさんによる裾野の未来都市の建設などに関わっていくのも一つのアイデアではないかという御意見がありました。

また海外、特にアジア諸国から優秀な高校生を農業高校などに受け入れてほしい。身近なアジアからすばらしい先生をたくさん呼べるような環境整備をすると、本当の意味でのグローバル人材が育つのではないか。小学生のうちから、流暢でなくても英語でお互いに通じ合えるような、そういった英語を毎週使うようなことも大事ではないかという御意見もありました。

一方で、世界に貢献できる人材を育てていくという考え方にしないと、世界に行くということだけ、つまり静岡から離れて世界に出ていくところだけが目的になってしまう。そういうゴールの設定を誤ってしまうのではないか。例えば、静岡にいても世界に貢献するということは十分できるわけで、世界に貢献できる人材というのがどういうものなのか、もう少し具体的なイメージを考えなければいけないのではないかという御意見もありました。

最後のところになりますけれども、教員が一人でも多くの生徒に目を向けられるような状況をどうつくっていくかが非常に重要である。これは、このトピックだけではありませんが、先生方の多忙化というのがいろいろな意味で足かせになっているので、多忙化の解消に向けた取組が必要だという御意見。本当の意味でのグローバル

人材を育てていくのであれば、授業を完全に英語でやるくらいでなければ駄目なのではないかというかなり語学習得に向けたラディカルな御意見などもいただきました。

私からは、実践委員会の御意見として以上でございます。

川 勝 知 事： 池上先生、ありがとうございました。

今御報告いただきました未来を切り拓く多様な人材を育む教育についてでございますけれども、これについて教育委員の皆様方からの御意見をいただきたいと存じますが、いかがでしょうか。

それでは藤井委員お願いします。

藤 井 委 員： この論点に関して、総論的な観点から3つまず申し上げたいと思います。

1つ目は、とにかく教える側の先生方が、自分たちの持っている価値観を変えないといけないと思います。要は、先ほども池上先生の間接報告に関連して触れましたが、これまでの教育の姿というのは、横並びであり、金太郎あめであり、護送船団であり、均一性・同一性を求めるような価値観で教育をしてきたと思うのです。ですから、その観点を一切オールクリア、リセットして、とにかくもぐらたたきを止めて、むしろ出っ張る杭をいかにたくさんつくるかという価値観から教育を進めていくように変えていかないとはいけません。教える側の改革が必要だと思えます。

それから第2点目は、これは極めて一般的な話ですけれども、芸術であれ、スポーツであれ、とにかく幅広い多岐にわたる本物にいかにつれる機会を多く生徒たちに与えるかという工夫が必要だと思えます。

それから3点目は、言わずもがなですけれども、情報機器だとか、人工知能だとかということのをこれから駆使した教育が決して避けられない方向性だと思えます。これを駆使して、基礎教育の効率化を徹底的に追求していくことによって、先生方の時間的、物理的、精神的な余裕というのが相当新たに生み出されると思うので、その生み出された時間をいかに有効に使って、生徒たちが個々の力を伸ばす時間に振り当てるかという工夫が必要だと思えます。

今申し上げた3つの観点から、多少各論ですけれども、生徒の中には類似する才能を持った生徒たち、あるいは同じような分野に興味を持った生徒たち、括りが幾つもとたくさんできてくると思うのですけれども、そういう生徒たち同士を幅広く交流させて、お互いを刺激し合うような仕組みが必要だと思えます。

これは、狭い意味で捉えると、学校の中、クラスの中ということになってしまうのですが、私が言いたいのはそういうことではなくて、学級だとか、学年だとか、学科だとか、学校の種類だとか、あ

るいは地域だとか、私立・公立、こういうもの、一切垣根を取り払って、そういう生徒たちを交流させる。それによって、刺激を方々に与える結果として、才能だとか、潜んでいる可能性というものを伸ばしていくような工夫は考えられるのではないかなと思います。

それから、もう一つは特技とか、才能とか、興味を持っている生徒たちが、先生に教えられるのではなくて、自ら考えて学ぶ時間を学校の教育の中に積極的に導入して、それ自体を単位として組み込んでいくような工夫ができれば、それはそれで生徒たちを伸ばす大変大きなきっかけになるのではないかなと思います。

ということで、言わば生徒たちが自分を発見する機会をいかに多く与えるかということが、この才能教育には絶対欠かせない大きなポイントだと思います。

以上です。

川 勝 知 事： 建設的な御意見をいただきましてありがとうございました。
それでは、こちらのフロアの方はいかがでしょうか。
レディファーストで、渡邊委員からお願いします。

渡 邊 委 員： 御配慮いただき、ありがとうございます。
私も今回、未来を切り拓く多様な人材を育むということがタイトルになっているので、別冊資料の様々な取組について一生懸命目を通させていただきました。

その中でちょっと気が付いたのですが、いわゆる成績優秀者の方たちのプログラムは物すごく充実しているというのがまず持った印象です。ですので、いわゆる学力がある程度ある生徒については、様々なプログラムがもう用意されているので、その生徒が自分で選んで、いろいろなものに参加していく土壌は整っているのではないかなというのが1点。

そして、今後多様な人材と考えた時に、いわゆる学力が高いという部分において参加できるプログラムの他のもの、もっと多様なプログラムを推進していく必要があるのではないかと考えました。

具体的に言いますと、私の目についたものは、こちらの別冊資料の中の22ページに、「未来を切り拓くDream授業・賀茂版」というものがあります。これは、その前にDream授業が行われまして、総合教育センターとか、県庁で行われたという記録があるのですが、こちらは全県で30名、でも本当は応募者数が107名もあったのですが、30名に絞らなければいけなかったという事情があったり、こういうものを目にして、参加してみようという子供たちは、やはりどちらかということ、静岡県の中でも交通の便の良いところに住んでいる子供たちが中心のプログラムではなかったかなと思います。

それに比べて、これはわざわざ賀茂地区にこのプログラムを持っ

ていきたいと思いますというところで、静岡県は交通の便がどうしても不便なところもありますので、これを賀茂地区で行うということにより、伊豆半島地域の子供たちはどれほど勇気付けられることでしょうか。

ですので、ここに新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって中止の可能性も書いてあるのですが、せっかく私たちもこうやってオンラインで会議ができるようになっていくわけですから、ぜひオンラインであっても開催するという方向で、静岡県のあらゆる地域の子供たちがDream授業のような先進的なものに触れるチャンスを増やすということをお考えいただければと思います。

そして、次に私が気になったのは、今も改めて当日資料で、掛川未来創造部Paletteのことを御紹介いただいているのですが、教育長と御一緒させていただいて、私も発表会を見に行かせていただきました。そうしたら、地域の中学生在が自ら脚本を書き、演出をし、音楽もつけということで、非常に創造的な学校間を超えた活動をしていたのです。ともすれば、学術分野に偏りがちなプログラムではあるのですが、ここでは地域の人材の方々に芸術分野で支援をしてもらっている、まさに多様な活動の一つとして、非常に意義深いものではないかと思いました。

私はPaletteのことをここで初めて知ったわけではなくて、以前、全国の部活動学会に部活動のことを調べに行った時にも先方から紹介されまして、静岡県人なのに知らなくてごめんなさいというような思いをしたことがあるのですが、全国的にも、地域で行われている部活として、全国の方からも非常に評価の高い活動ということをその場で確認いたしましたので、このような活動がもっと県内全域に広がること、また様々な分野に広がるということを期待しております。

それからもう一点、今度はこういう活動にどんどん出てこられるような生徒たちはいいのですが、いわゆる普通の子というような、比較的小となしいような子供たちにも、多様な人材として活躍の場を持っていただきたいわけなのです。キャリア教育というと、ともすると夢や目標を持ちなさいというような指導から始まることが多いわけなのですが、将来の進路をどうしたらいいか分からないので、取りあえず普通科に行きますよというような生徒の中には、自己肯定感が低かったり、自己高揚感をどこに求めたらいいか分からないということで、自己理解がまだ必要だというような生徒たちもたくさんおります。

ですので、最近の議論になりますけれども、多重知能理論ですとか、必ず一人一人得意なことがあるので、それを見つけて、それを一つ一つ積み上げていくことで自分の将来に向かっていきたいと思いますとか、目標に向かって歩いていくということではなくて、大

まかな自分の在り方というものは認識しつつも、一つ一つ目の前のことを積み重ねることでキャリアを積み重ねていくというような、資料に載っているようなプログラムに参加するのをためらうような子供たちであっても、自分の居場所が見つかるようなプログラムも導入していけると、より良い教育に結びつくのではないかと考えました。

以上です。

川 勝 知 事： どうも渡邊委員ありがとうございました。
それでは、後藤委員お願いします。

後 藤 委 員： 私も、藤井委員や渡邊委員がおっしゃっていることと基本的にはダブってしまうと思いますが、やはり自分で考えて自分で問題を解決を図るという子供たちを育むことは大変大事だろうと思うのです。

クリエイティブといいましょうか、自分で創り出していける力というのを持ってもらうしかない。では具体的にどうするのかというと、大変難しいとは思いますが、私の体験的なことから言えば、何でも好奇心を持つということだと思います。興味を持ったことをそこで終わりにしないで行動に移すという、いろんな実行に移すということがもっと大事ではないだろうか。そういうことによって、自分で問題を見つけて、その解決策を図っていくという力を身につけてもらう若い人たちがたくさん出てくれればいいなと期待をしております。

ところが、例えば先ほどからグローバル人材の件で英語の問題なども出ていましたが、少なくとも私が知っている方でも、一流の学校を出て、そして英語もペラペラだと。ところが、実際に外国人にいろいろ話をしてもらっても全く振り向いてもらえないというケースを幾らでも見ております。それは何だというと、結局そういう人は話題がないのです。ただ知識として持っているけど、要するにその裏づけになるものを持っていない。

だから、私は人間の魅力がなければ駄目なのだとということだと思いますが、ではそれはどうしたらいいかと。これまた難しい問題なのですが、私が言うと、ちょっと我田引水になってしまうかもしれませんが、やはり静岡の個性を出すべきだと思うのです。

それは、具体的に何をしたらいいかというと、例えば家康学なら家康学というものを打ち出して、小学生あるいは幼稚園の時から家康について徹底的に勉強させると。それによって、静岡の人というのは、徳川家康のことについては何でも知っている。それに関連して、政治や経済や社会の話もいろんな知識を持つ。勉強も勉学もすると。

そういう静岡らしさみたいなものを持っていく必要があるのでは

ないかと。地域のいわゆる偉人というか、これは反対意見ももちろんおありになると思いますが、議論のための議論をしていても意味がないので、やはり実践に移すにはどうするのかということ、具体的などころで、そういう静岡の学問をつくっていくというような裏づけがあると、さっきのグローバル人材にも自然につながっていくのではないだろうかということをご期待したいと思っております。

以上です。

川 勝 知 事： ありがとうございます。
 それでは、ウェブで御参加の小野澤委員をお願いします。

小 野 澤 委 員： 未来を切り拓く多様な人材ということですけど、まだ自分も42歳で、いろいろ勉強したいなどは常々思っています、なので、生涯学習ではありませんが、学校開放みたいな形で、その拠点に高校の方がなっていけば面白いのではないかなと常々思っていて、僕の周りでも、また健康増進とか、そういう部分で自分の体に興味を持った年配の方向けの施設として、いろいろサポートしたいという企業の方がすごく多くて、そういう人たちが集まる場で、それこそ今だんだん少子化で、教室が空いているのであれば、そういうところでも、体や頭の部分での生涯学習、そういうところで学校にもう一度集まってみて、そういう自分の興味に対して、また学びたいという年配の人の姿を見ることで、また教員たちだけがどんどん学び続ける教員というだけじゃない、大人がずっと学んでいるという姿勢を見られるというのも、一つ子供たちにとって良い刺激になるのではないかなとは思っている、そういう部分でも、地域に対しての開けた学校開放の可能性というのはどれぐらいあるのかなと思っています。

 そうすることで、もしかすると、そこに来た人たちが次の先生になって、外部指導員になる。そういうお金の回り方という次の可能性にも広がっていくのではないかなと考えているので、学校の方でも、また学校自体が稼ぐ仕組みの可能性も考えていきたいと思っています。

 以上です。

川 勝 知 事： ありがとうございます。
 学校が立地しているところというのは、小学校・中学校は言うまでもありませんけど、高校でもそうですが、通いやすいところというところに立地していますから、今委員の言われたことは十分可能性のある御提案ではないかと思われました。

 伊東委員、いかがですか。

伊 東 委 員： この未来を切り拓く多様な人材を育む教育、これ先ほどもちよつと申し上げましたけれども、参考資料とかに興味深いいろいろな試みが出ています。さっき、こういうことをもっと周知させる必要があると申し上げましたけれども、もっとまねし合う必要があると思うのです。だから、どこか1校がユニークな試みをやりました。それだけでは駄目で、それがすばらしいと思ったら、他の学校がみんなそれをまねして広げていくというアクションが続いていかないと、エネルギーの無駄遣いになってしまう。だから、もっとこういういろいろな先進的な試みというのをまねし合う環境というのをつくと。そのために、事例をきちんと紹介するようなことができるようにするということが必要だと思います。

この多様な人材の育成、これはもう議論をするよりも実践をしなければいけないフェーズに来ていると思っていて、事務局でもトンガッタ学校づくりで少し具体的なプランも書いているようだし、グローバル人材に関しても、バカロレアに関しても、少し検討を開始すると聞いております。だから、これも議論も大事だけれども、きちんと行程表を作って、実践をしていくというフェーズに入るべき課題ではないかと思います。

以上です。

川 勝 知 事： まとめのような御発言をいただきましてありがとうございました。
池上委員、受けていかがですか。

池 上 副 委 員 長： ありがとうございます。

ここからは、委員会の副委員長というよりも、むしろちょっと個人的な意見になるのですが、とは言いつつ、今も渡邊委員からお話しいただいた例の「未来を切り拓くDream授業」に、初回と2回と私関わって、特に子供たちがディスカッションするところのまさにコーディネーターをやったという経験を基に、お話をさせていただきたいと思います。

私自身は、「未来を切り拓くDream授業」というのは、すごい先駆的、そして可能性を持った事業だと感じています。もちろん実際に集まって関わる生徒は30名と限られた子供たちですけれども、その子供たちが県内1か所に集まって、まさに刺激をし合って、そしてまた自分の学校に帰っていく。その刺激を受けて戻ってきた子供の姿を見て、周りがまた感化されていくという波及効果はとても大きいだろうなという感じがします。

それは、また今回賀茂地域で、賀茂キャンパスで実現したということもとてもうれしいなと思います。私、3月まで副学長を仰せつかってしまして、その副学長の職務の一つに地域連携があるものですから、賀茂キャンパスの立ち上げの段階で静岡文化芸術大学を代

表して何回か足を運ぶ機会がありました。そして、賀茂キャンパスに込められた地域の皆さんの熱い思いというのを感じた次第です。

というのは、賀茂キャンパス立上げの会が県によって主催される前日の晩に、地域の方々に集まっていたのです。まさに今回賀茂キャンパスというのを、賀茂版をやる講師になっている方々から想いを直接聞くことがあって、それがこういう形で子供たちと関わる機会に結実したというのをとてもうれしく思っています。

それから、互いに刺激し合う仕組みというのを、今までは何かどこかに集まらなければという発想で私たちは考えていたのだけれども、コロナはいろいろな未来を切り開いた。とんでもない未来でもあると同時に、予期せぬ未来、例えば今県下全域に散らばっていった、かつてDream授業を受けた子供たちを、それから2年、3年たって、もし可能だったら、私は今年の夏、その子供たちをつなぐZoomの会議をやってみたいと思うのです。今は高校の2年生と1年生ですね。中学の時に、僕はこういうふうになりたい、あんなことをやってみたいと言っていた子たちが、それから高校に入って2年、2年生になれば、当然その先の進路を視野に入れます。今どうなっている、どんなことをやったということをぜひ共有してみたいなと思うのです。それは予算がないとできないとか、いろいろ難しいところがあると言っていたけど、ではZoomでつながろうよと。これはできるのです。

そのようにして、お互いを刺激し合うような機会は、去年の今頃だと、きっとこんな議論、まだできていなかったと思うのですが、今年だと、Zoomだったらいけるよねというふうになると思うのです。だから、そういう新しい可能性をどんどん、こうやって子供たちがお互いに刺激し合う枠組みを柔軟に、縦横にでもいいかな。地域を越えて、あるいは同じ関心を持っている子たちが集まってくとか、できるといいなと思っています。

もう一つ、先ほど掛川のPaletteの話がありました。これには、私はとても可能性を感じていて、県下では清宮さんが提案されて、ラグビーと陸上でしたか、磐田で学校を超えた指導の枠組みができました。私もそれを見学に行かせていただいたことがあるのですけれども、一方で、私自身は高校時代、文化部、ジャズ研にいたということで、ぜひそういうなかなか指導する人がいない、少ないところの文化部にも、学校を超えた枠組みで指導ができるといいなというようなことを実践委員会で発言したことがあります。

Paletteのような形で、文化系のところでも枠組みができたということは、すごく私はうれしいと思っているし、これも県下各地で、今の伊東先生の話ではありませんが、もっとあちこちでまねて、それぞれの地域の特色を生かした活動に展開していくといいなと思っています。

以上です。

川 勝 知 事： ありがとうございます。
 教育長として何かコメントございますか。

木 苗 教 育 長： 今、先生方のお話を伺って、僕も教育長になってすぐでしたが、小さな学校と申しますか、だんだん生徒の数が減ってしまい部活が成り立たない、今も中学野球で3校で1チームというのが幾つかあるのです。いつも島田球場に始球式で出ていくと、同じチームなのにユニフォームが違うのです。そういうようなことで、女子が出場するなど、男子も女子も一緒になってやれるように随分変わりました。

それから、もう一つは先生もおっしゃられたように、部活の指導者がいないということでは、磐田だったのですが、最初に伺って、そして互いに企業がありますので、現役を退いたコーチとかに教えていただくために、生徒が中学生、場合によっては小学生、バスで回っていただいて集めて、そして1か所でグラウンドで指導して、また戻していただくということもすぐできました。

特にこれから文部科学省の方で部活動が控えめになってきて、先生方がちょっと外れてもいいようなことがあるものですから、それを全県に広めていく形で静岡はやっているなと思って、静岡がそういうふうになれば、先生方も落ち着いて、授業をやる人はやる、それから体育をやる人はやるというようなことで、静岡方式を打ち立てていったらいいのかなと思っています。

以上です。

川 勝 知 事： 一わたり御意見をいただきましたが、先ほど話題になったDream授業は、実践委員会で提言されて、教育委員会で御承認賜って動きました。

それから、磐田を中心にした地域のスポーツ、学校を超えたスポーツクラブをつくるということで、ラグビーと陸上というところから始めようということで、ラグビーなどは学校を超えたチームが全国でもすごいところまで行ったという報告を受けていますけれども、そういうのも実践委員会で提言がございまして、こちらで御承認を賜りました。

ラグビーの場合には、御案内のように、実践委員会でテキストをつくれということで、こちらでまたもんでいただいて、それをいわゆるラグビーの選手のプレーを見るのではなくて、ラグビーのルールと精神を学ぶという基礎をつくって、その結果、静岡ショックと後に言われますけれども、応援に来た生徒さんがルールを分かっているものですから、物すごい歓声が子供たちのところから響き渡る

ということがあって、こんなすごい観客は見たことがないというようなコメントまで出てきたわけです。それが本当に静岡ショックではなかったかと思うのです。

そういう意味で、冒頭、藤井委員から、これまでの同質的な、金太郎あめ的なものはこれで終わりにしなくてはいけないというのは、重要な宣言であると思います。もちろん発展的に継承しなくてはいけないところもありますので、今まで重視されてきた偏差値といいますか、学力偏重、学力はそれ自体大切ですから、それはそれとしてありますけれども、それ一辺倒は、これで金輪際違う形で多様な人材を育てていく方に舵を切ろうと。

最後に伊東先生から、静岡県、いろいろなことを教育委員会の方でも、また学校の方でもなさっておられているということで、学校の方でも地域に根ざした形で、学校の個性を生かそうとされているわけです。一方、様々な社会の人材が、地域の生涯学習といいますか、教育に、人材育成に関わっていこうというので、啐啄同時といいますか、両方から今改革の動きが出てきているということです。

したがって、後藤委員が言われるように、まさにこれは実践をしていくということで、実践するときには地域に根ざしていかななくてはいけないので、したがって、どういうところに焦点を当てるかと。

例えば、家康学というのも一つでしょう。あるいは、今川学もそうでしょう。あるいは、ジオパークで小学生から高校生までが伊豆半島について自ら勉強して、高校生が小学生に教えに行くとかと、これも地についての学問です。

同時に、ただ全く個別の学問で完結しているかということ、家康となれば、戦国時代や、あるいは徳川時代250年間や、あるいは対外的な鎖国との関係や、こういうものに広がっていきますから、この部分から全体を見るという、あるいは少なくとも抽象的でなくて、グローバルな目はどこかに必ずあるということで、しかし、人にあるいは地域に、あるいは出来事に特化しながら、それについてのかなり高いレベルの知識を持つと。こういう実践の提言も頂いておりますので、特に中学校を卒業すれば義務教育ではありませんので、もっと自由度を高めた方がいいと。どういう自由度を高めていくかということについて、実践の提言をいろいろいただいて、これをできるものから少しずつ始めていくということで、しかもそれは上から押しつけるのではなくて、それぞれの地域のやりたいことを支えていくという方向で、実践を促していくというふうに言えるのではないかと思う次第です。

一わたり意見をいただいたので、最初の才徳兼備の小委員会の報告、並びに未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進、どちらにわたっても結構ですので、残りそんなにたくさん時間はありませんけれども、御発言いただける方がいらっしゃるならば御自由にどう

ぞ。いかがですか。

それでは、藤井委員からお願いします。

藤井委員： どちらかというところ、この論点2のグローバル人材についてですけれども、実際のいろいろな具体策、施策を拝見しても、どうもグローバルということになると、国際だとか、海外だとか、外国語だとかいう切り口から、いろいろプログラムができていますが、私はちょっとそうではないと思うのです。そういう見方も、これまでに他の委員の方からも出ていましたけれども、グローバル人材というのは海外との接点だとかということだけではなくて、言わば多様性を理解し、受け入れることができること、これがグローバル人材だと思うのです。したがって、グローバル人材の育成というのは、いかに多様性を理解し、受け入れられる人たちを育てていくかということだと思っています。

それを申し上げた上で、例えば私自身の経験からでもありますが、基本的にももちろん日本語教育はしっかりやらなければいけません。一方で、一つのきっかけとして外国語、言わば英語ですけれども、英語に触れる機会を増やすこと、置き換えて、外国語に触れる機会を増やすことは、やはり多様性の理解や受入れにもつながる要素を非常に多く含んでいると思います。

文法とかということではなくて、あくまで生きた語学、生きた英語、生きた外国語の教育をしっかりとやることによって、違った文化だとか、環境だとか、価値観に触れる機会を多く与えることになると思うので、ぜひ英語教育を、そういう観点から徹底することによって、グローバル人材を育てるということを更に強力に推進していきたいと思うと同時に、英語のみならず、もう少し無理をしても第2外国語、何語でも構わないのですが、英語とは違う外国語に触れる機会を生徒たちに多く与えることによって、何か生徒たちが、触れる機会の中で、琴線に触れる感覚を呼び起こすような機会が多くできると、それこそグローバル人材、多様性との関連性が出てくるのではないかなという気を非常に強く持っています。

私の経験云々と少し触れましたが、そんなに英語は堪能ではありませんが、もう随分古い趣味ですけど、皆さん御存じかもしれないアマチュア無線というのが、最近でこそ廃れてはいますが、私自身昔やっていました。それで、無線を通じて海外のどこか全く分からない国の人と英語で話すような機会が楽しみで、その趣味をやっていたのですが、その趣味をやることによって、随分いろいろ若い時に感じ取ることが非常に多くて、それがそれこそ会社勤めのベースになったような流れがありまして、そういった機会を生徒たちが多く持つことが、いかに有用であるかということを感じているものですから一つ申し上げた次第です。

以上です。

川 勝 知 事： 重要な論点をいただきまして、ありがとうございました。
今、ようやく静岡県の高등학교の海外への教育旅行、修学旅行が日本一になったのではないのでしょうか。そういうことで、ただ英語圏というよりも、なるべく近くて安全で、親日的で、事故が起こりにくいところということで選んでいただいておりますけれども、とにかく日本語が通じない、全く自分の文化が通じないところに体を置いてみる。こうしたことは、藤井委員がおっしゃるように、グローバル化といいますか、そうした多様なものを認める重要な体験になるという、そのとおりだと思います。ですから、高校生は全員パスポートを持ってくださいと要請したのがもう10年以上前ですが、どこも勝手なことをおっしゃいました。
では、池上委員よろしくお願ひします。

池上副委員長： 池上でございます。
今の藤井委員のお話に刺激を受けまして、確かに高校までの段階だと、日本語以外の外国語ニアリーイコール英語というふうになってしまふし、私自身の高校時代もそうでした。ただ、今2020年代の静岡を見てみると、皆さん御案内のように、ブラジルの方がたくさんいらっしゃるし、ペルー、フィリピン、インドネシア、ベトナム、たくさんの方がいらっしゃいます。
静岡県は、ふじのくに親善大使といって、留学生の方々をある程度ネットワークする機会ができていたのですが、最近では、働きに来た方々の中にも、少し余裕を持って地域と関わっていくという方が出ておりますので、例えば学校でタガログ語を聞いてみるとか、あるいはポルトガル語の挨拶を学んでみるとかいう機会を持つと、英語だけではない世界が実はあることに気付くのではないかと思います。
私自身は、実はインドネシアの研究者でして、インドネシア語の使い手なのですが、インドネシア語を学ぶことによって、私と英語というだけではなくて、そこに第3の軸ができて、何か合わせ鏡で自分の後ろ姿を見るような、非常に自己認識に新たな視点を得たという経験がございますので、英語以外の言葉に触れてみる、あるいは英語圏以外の方の暮らしに触れてみるという機会を持つのはとても大事だろうと思います。静岡県は、そういう意味でいうと、地域に定住外国人の方、あるいは留学生、実績というか、人材がいっぱいいるということを生かしていけるのではないかなと思います。

川 勝 知 事： ありがとうございました。
今、静岡県には10万人の外国人の方たちがいらっしゃいます。360

万のうちの10万ですから、まだ3%にも満ちませんけれども、しかし、それぐらいいらっしゃる。1割くらいになると、相当存在感が出てきます。これは外に行く国際化ではなくて、内なる国際化と言えると思いますが、ポルトガル語、すなわちブラジルの方たちは大体3万人ぐらいいらっしゃる、西部に多いんですけども、これは静岡県の重要な財産だと。

そして、またムスリムの方たち、インドネシアなどを中心にして、マレーシアからもいらしていますけれども、そういう方たちもいらっしゃる、モスクもついに建設されたということもございます。彼らは、もちろん食べるものも違います。規律がそれぞれございますから、そういうものを受け入れると。これも一つの地域のグローバル化といいますか、国際化と言えるのではないかと。この点、大変重要な御指摘だったと思います。

他に何か関連して御発言等ございますか。

家康学は、たしか徳川みらい学会というのがあったわけですが、これは、芳賀先生が亡くなられて非常に残念なのですけれども、その後どうなっているのでしょうか。

後藤委員：　今は、小和田先生が会長をやっています。

ですから、先ほどからの議論と同じですが、グローバル化していくということは、ただ海外へ広がっていくという意味ではなくて、根っこがあってのグローバルかなと思うのです。だから、しっかりした根っこを持っていないと、それこそ自分の座標軸というのが分からなくなってしまう。だから、それだけに静岡県民が共通して認識できるものを何か強く打ち出して、富士山だって僕はいいと思うのです。やはりしっかりしたそういうものを持って、その上でグローバルでも何でも思うのです。

今、英語のお話も出ていましたが、恐らく我々の次の時代の人たちは、もう英語ではなくて中国語になっているのではないのでしょうか。世界がそういう時代になっていますからね。20年、30年たったら中国語ができないと通じないというような時代になっていると思って、変化していかなければいけないと私は思います。

川勝知事：　ここでは議論になりませんでした。ウーブン・シティ、今年の2月23日、一応予定されております。建設がその日から始まります。これは2,000人の街で、しかも公用語は英語と、共通語は英語にすると豊田章男さんがおっしゃっておられまして、世界の憧れ、世界が注目している国際的な街が、間もなく建設が始まります。こういう時代を迎えているということも一つの情報であります。

彼らが来たら、子供さんも来るでしょう。そうすると、その敷地から出たら、あとは静岡弁しゃべっていますからね。だから、静岡

弁がいずれ子供を中心にあつという間に広がって、ですから、静岡弁が共通語に、国際語になっていくのではないかなあと思ったりして楽しみであります。

藤井さん、手を挙げられました。どうぞ。

藤井委員： ちょっとそのことに関連してですが、私の理解がもし間違っていたら御指摘いただきたいと思うのですが、ウーブン・シティに関連した全寮制のインターナショナルスクールは知事部局の方で取り扱われて、一方、教育委員会としてはバカロレアをベースにした高校を新たにつくろうという構想があつて、それぞれが違ったものを行おうとしているということと理解しています。ただ私自身は、静岡の県内に全寮制であれ、バカロレアであれ何であれ、要は多様性の勉強の場としての高校をやっぱり積極的につくっていくべきだと思うので、そういう意味では知事部局と教育委員会、もちろん連携してやっていくのしょうけれども、あまりばらばらにならないように、それぞれがいい意味で補完しながら、二重の手間がかからないような形で、そういった新しい高校の構想が実現していくことを望みたいと思います。少し意見を申し上げました。

川勝知事： そのとおりだと思います。

藤井委員は、前から全寮制の、土・日は家に帰り、あるいは夏休みとかクリスマスバケーションとかは帰ると。しかし、基本的には学校で衣食を共にする、こうしたことの重要性を力説されて、まだ実現していないので、本当に残念に思いますが、ぜひこの点は教育委員会としても正面から受け止めていただきたい。

それから、国際的なインターナショナルスクールについては、バカロレアの方は教育委員会から進めて、これはちょっと時間がかかりますね。一方、インターナショナルスクールについては、既に実績のあるところがございますので、これを静岡にランチを持ってきていただいて、小さく産んでどのぐらい育てられるかということで、情報を共有しながら教育の国際化を進めていこうと思っております。

どうぞ、後藤委員さん。

後藤委員： たまたま今全寮制とかというお話も出ましたので申し上げますと、つい二、三日前の話なのですが、私は高校時代3年間寮でした。それは全寮ではないのですが、寮生活を送りました。

それについて、某新聞社から高校時代のいろいろな感想を聞かせたいというので、こういう時代なので電話インタビューでしたが、いろいろ質問されて、いろいろ考えてお答えしていったのです。今振り返ってみると、ちょうど高校1年生って16歳ぐらいで

す。ですから、この16歳から18歳までの3年間、寮の生活というのは、今さら言うまでもありませんが、3年生は神様で、2年生は天皇陛下で、1年生は奴隷ですからね。そういう本当に自分の人生の方向性をそこで決めたような、言われてみて初めて気がついたのですが、そういうインパクトがあったということだと思うのです。ですから、ぜひ全寮制のものが実現できれば、私は大変期待したいと思っております。

川 勝 知 事： そうですね。高校3年間で1年目は奴隷、2年目に天皇陛下になられて、3年目に神様の経験をされた後藤さんの画期的な経験も、その3年間であったということでございます。

これは本当に一斉にというふうにはいかないかもしれませんけれども、例えば川根本町のような数十人しかいらっしゃいませんので、そういうところで全部が全寮じゃなくても、一部の方だけが寮に入っていられるというふうなことからでも。

後 藤 委 員： 軽井沢に学校ができたらしい。

川 勝 知 事： そうです。これはもう大分前から国際的なのがありまして、この学校をこっちへ持って来ようともしましたが、今考えておりますインターナショナルスクールが25年ぐらゐの実績を持っていらっしゃるプライベートなところで、これはちょっと形ができていませんので、発表するには至っていないということで申し訳ありませんが、もっと小さなものです。ただし、教育内容は、ケンブリッジの方からカリキュラムが国際水準に達しているというお墨付きをいただいた組織であります。

そろそろ時間が来ましたけれども、いかがでしょうか。

グローバルという意味では、今年はオリ・パラがございますので、スポーツは文字どおり人類をつなぐ重要な文化でございます。ですから、地元だから言うのではありませんけれども、スポーツを通じて一気に世界の人々をつなぐということもできるわけで、我々教育委員の中にも、また実践委員会の中にもスポーツマンがいます、その経験も生かした形で、多様な人材育成に努めていきたいと思っているところであります。

それでは、御意見がなければ、ここで協議を終了いたしまして、教育委員会を代表して木苗教育長先生から一言お言葉をいただきたく存じます。

木 苗 教 育 長： 本日は、才徳兼備の人づくり小委員会中間報告及び未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進について、極めて積極的かつ有意義な御議論をいただきまして感謝しております。

特に池上先生におかれましては、最初から最後までいろいろと御説明をいただき、御発言をいただきありがとうございました。

才徳兼備の人づくり小委員会の中間報告に関しましては、私も何回か読ませていただきましたが、それに本日各委員の方々から御意見もいただきましたので、小委員会におきましては、年度末の最終報告に向けて、多分引き続き御協議いただくことになると思いますけれども、最終報告をいただいた際には、我々も可能なところからスピード感を持って実行に移せるようにやっていきたいと思っておりますので、今後ともよろしくお願ひします。

また、未来を切り拓く多様な人材を育む教育の推進につきましては、新型コロナウイルス感染症の状況を見極めていく必要がございますので、この辺は十分に配慮いたしますが、子供たちが持つ大きな夢や可能性を十分に発揮できるように、一人一人の状況に応じたきめ細かな対応とともに、時には世界を、先ほど来お話がありましたように、世界を視野に入れた大きな取組といいますか、チャレンジ、そういうようなものも積極的にやって成果を求めてまいりたいと考えております。

本日の会議を通しまして、それぞれのいただいた御意見につきましては、私もメモをさせていただいておりますし、私自身もそれなりに考えてきたことで、なかなかグローバルという言葉では追いつかない部分がありますけれども、皆さんとはこれからもいろいろな意味で御支援いただきながら、この静岡県の教育委員会がより一層充実したものになるように、ぜひ御意見をいただけたらありがたいと思っております。

本日は長時間にわたり、御協力、御意見をいただきましてありがとうございました。厚く御礼申し上げます。

ありがとうございました。

川 勝 知 事： どうも木苗教育長ありがとうございました。

地域自立のための「人づくり・学校づくり」実践委員会というのが出来上がって、検討委員会も入れますと五、六年になるわけです。当初、教育委員会との関係がなかなか追いつかないということもあったわけですが、実践委員会の方で小委員会をつくっていただいて、具体的に調査していただいたものが、こういう形で報告されて、そして私の感じでは、教育委員会と実践委員会との関係が非常に調和してきたなと思っております。

そういうことで、今回こちらの教育委員会から出た意見は、ぜひ小委員会の最終報告に生かしていただくようお願いを申し上げるものであります。

それから、かなり具体的なこれから実践ではないかということで、従来の陋習にとらわれず天地の公道に基づくべしという五箇条

の御誓文ではありませんけれども、正しいと思ったことをまず実践していくということで、もちろん皆さんの御了解、御賛同を得た上ででございますが、できるところからやっていくということで、具現化に向けて、それぞれの執行機関で責任を持って、速やかに取り組んでいくようにしていきたいと思う次第でございます。

ちょうど予定していた時間になりましたので、これで議事を終了いたします。

それでは、進行を事務局にお返しいたします。

事務局： 長時間にわたる御審議ありがとうございました。

なお、次回第4回総合教育会議につきましては、3月24日水曜日午前10時からの開催を予定してございますので、よろしく願いいたします。

以上をもちまして、第3回静岡県総合教育会議を終了いたします。

ありがとうございました。